

障害者の高齢化に対する親の思いについて

—保護者に対するアンケート調査の結果から—

The Thoughts of the Parents to the Aging of Their Mentally Handicapped
—Through the research on the parents of mentally handicapped—

三原博光(看護学部)
松本耕二(社会福祉学部)
Hiromitsu MIHARA
Koji MATSUMOTO

要約

本研究の目的は、アンケート調査を通して、障害者の高齢化に対する保護者の思いについて明確にすることであった。その結果、274名の保護者から回答が得られた。この保護者の大部分は、母親であった。彼女達は、子ども達の障害の程度にかかわらず、障害者の老後について不安を抱えていた。ただ、不安を抱えながらも、保護者達は、自分の子ども達が年老いてきたと感じていなかった。また、障害者自身の多くも、自分が年老いたと感じていないようであった。多くの保護者達は、障害者のきょうだい達に障害者の介護の期待をしていなかった。これは、保護者達が障害者のきょうだい達にあまり負担をかけたくないという理由からによるものであろう。

保護者達が期待する高齢の障害者の生活場所や人生の終焉の場所は、主に「自宅」、「グループホーム」、「現在生活をしている場所」であった。保護者達は、子ども達の住み慣れた生活環境で人生を終えることを望んでいるようである。

はじめに

現在、わが国は高齢社会を迎え、高齢者とその家族に対しては、介護保険に代表されるように様々な福祉サービスが提供されてきた。しかし、これらの福祉サービスは、一般の高齢者を対象に考えられ、高齢の障害者などはその対象に含まれ

ていないようである。ところが、筆者達の関わる山口県内の知的障害者更生施設では、60歳以上の高齢の障害者を抱え、彼等に対して、どのような福祉の対応をすれば良いのか問題を抱えていた。具体的に言えば、その施設は、高齢の知的障害者をそのまま施設で処遇をすれば良いのか、あるいは一般の特別養護老人ホームに入所させ、そこで処遇をすれば良いのかと言った問題を抱えていたのである。しかも、障害者の高齢化問題は、筆者達が関わる山口県内の知的障害者施設だけでなく、全国の知的障害者施設が抱える問題であり、知的障害者の高齢化を取り扱った論文は、1990年以降、様々な雑誌のなかで、報告されていることから、この問題の重要性が理解できよう(柄澤他, 1989¹⁾, 及川と清水, 1991²⁾, 及川と清水, 1992³⁾, 秦, 1995⁴⁾, 牧野, 1997⁵⁾, 山崎, 1999⁶⁾, 大泉, 1999⁷⁾, 石渡, 2000⁸⁾)。

ただ、施設関係者が高齢の障害者の処遇に様々な問題を感じていたとしても、長年、障害者を養育してきた保護者達が、まず、この問題に対してどのような思いと福祉的ニーズを持っているのかを調べ、それに対する福祉対策を検討すべきであると筆者達は考えた。なぜならば、障害者の家族で、障害者の老後を切実に感じ、その介護に強く悩んでいるのは保護者達の親達であると考えられたからである。そこで、筆者達とかかわりの深い山口県内と西宮市内の知的障害者障害者の保護者に

対して、障害者の高齢化に対する問題についてのアンケート調査を実施した。その結果、回答が得られたので、ここで報告することにした。

なお、過去、障害者の保護者に対するアンケート調査では障害者を持ったことに対する保護者のストレスなどの心理・社会的状況に関するものが多く（小笠原，1978⁹⁾，新美と植村，1985¹⁰⁾，新美と植村，1987¹¹⁾，三浦，1992¹²⁾，ゲアレスとハンゼン，1996¹³⁾）、高齢の障害者の問題に関するアンケート調査は、ほとんど実施されて来なかった。

II. 方法

1. 調査対象

山口市内の知的障害者通所授産施設「鳴滝園」の保護者達、西宮市の知的障害者育成会の保護者達を中心に調査を実施した。ここでは、筆者達とかわり深い組織を調査対象とし、特に地域差を考慮して調査を実施しなかった。調査期間は、2004年4月から8月までであった。

2. 調査方法

調査方法としては、アンケート方法を採用した。知的障害者授産施設と知的障害者育成会の保護者会にアンケート用紙を配布し、記入を依頼し、後に回収した。フェイスシートには、保護者の年齢、障害者の性別/年齢/順位/障害の程度/居住場所であった。

3. 調査内容

調査は、以下の項目を中心に行った。

- (1) 障害者の老後について
 - ① 子ども達の老後に対して不安があるか？
 - ② ある場合、その理由は何か？
- (2) 障害者の高齢化についての印象（身体的、心理的側面）
 - ① 子ども達が年老いたと思うか？
 - ② 思う場合、その理由は何か？
 - ③ 介護が必要となる状況があるか？
- (3) 障害者自身の高齢化についての認識
 - ① 子ども自身、高齢になることを理解していると思うか。

- ② 思う場合、その理由は何か？

(4) 障害者の介護について

- ① きょうだいに障害者の介護を期待するか？
- ② 期待する場合、その事を言葉で伝えているか？

(5) 職場での定年制の導入について

- ① 将来、授産施設などにおいても定年制の導入が必要であると思うか？
- ② 必要ではない場合、その理由は？

(6) 高齢の障害者の生活場所

- ① 高齢の障害者は、どこの生活場所が望ましいか？
- ② 高齢の障害者の人生の終焉場所

4. 調査結果及び考察

基本的属性：274名の保護者達から回答が得られた。記入者の内訳は、母親248名（90.5%）、父親16名（5.8%）、祖父2名（0.7%）であり、大部分は養育の中心である母親達が記入をしていた。保護者の年齢については、40歳代44名（16.1%）、50歳代111名（40.5%）、60歳代以上（39.8%）であり、大部分の保護者は50歳代以上であった（図1）。障害者の年齢については、20歳代111名（43.5%）、30歳代88名（34.5%）、40歳代以上32名（12.5%）、50歳代3名（1.2%）であり、大部分の障害者は、20歳-39歳であり、まだ高齢の年齢の状況に達していなかった（図2）。障害者の種類は、知的障害が252名（72.6%）、自閉症48名（13.8%）、肢体不自由児15名（4.3%）であり、大部分は知的障害であった。障害の程度については、重度182名（67.4%）、中度62名（23.0%）、軽度26名（9.6%）であった。障害者の順位は、第1子が127名（48.5%）、第2子98名（37.4%）、第3子33名（12.6%）であり、半数近くは第1子であった。

障害者の日中の生活場所は、通所授産施設が146名（53.9%）、通所更生施設34名（12.5%）、更生施設（居住）24名（8.9%）、自宅20名（7.4%）であり、多くの障害者は家族と同居している状況にあった（図3）。

以下、調査結果では、単純集計の報告と障害の

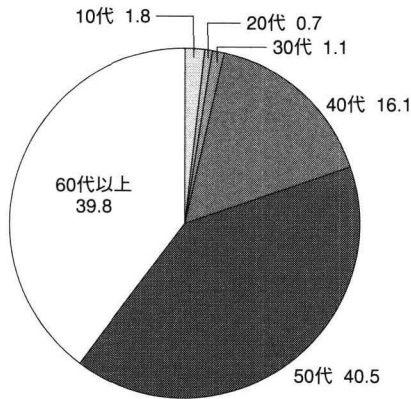


図1 記入者年齢

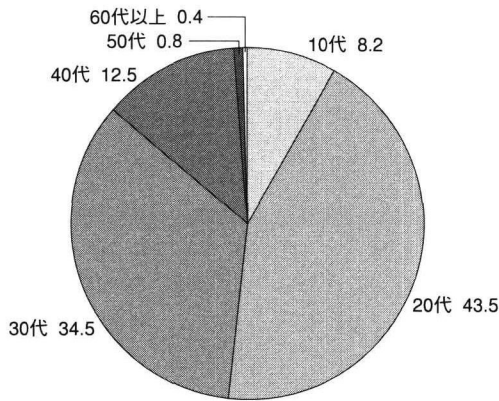


図2 障害者年齢

程度からの分析を行った。

(1) 障害者の老後について

① 子ども達の老後に対して不安があるか？

「非常に不安である」と「まあまあ不安である」と回答したものが250名(92.6%)であり、障害の程度とは関係なく、ほとんどの保護者がわが子の老後に不安を感じていた(図4)。

② ある場合、その理由は何か？

「両親自身が高齢となり、障害者の世話が困難」と回答したものが117名(47.6%)、「障害者のための老人ホームがない」77名(31.3%)であった。「経済的に苦しい」は、わずか4名(1.6%)であった(図5)。この結果から、保護者達は、障害者

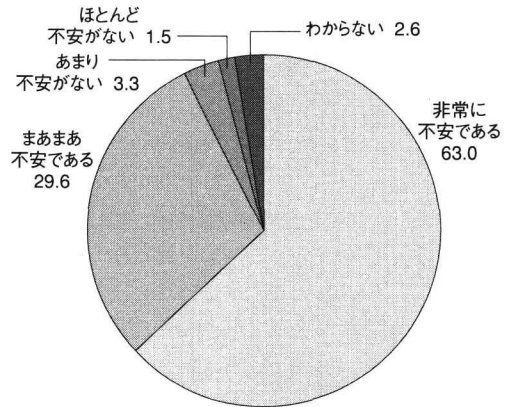


図4 老後の不安

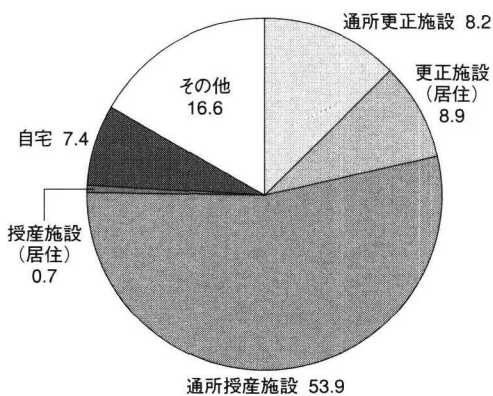


図3 日中の生活場所

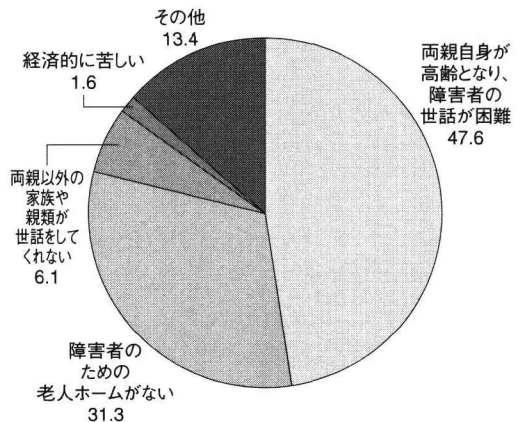


図5 不安理由

の介護を心配していることが示された。

ただ、「両親自身が高齢となり、障害者の世話が困難」の回答においては、重度の障害者と軽度の障害者の保護者に差がみられた（重度：軽度＝54.9%：28.6%）。重度の障害者の保護者は、軽度の障害者の保護者に比べて日々の子どもの介護に追われているので、不安が強くなったのかもしれない。

(2) 障害者の高齢についての印象（身体的、心理的側面）

① 子ども達が年老いたと思うか？

「よくある」と「時々ある」が103名（39.8%）、「あまりない」と「ほとんどない」が162名（60.2%）であり、あまり感じていない保護者が多かった。子ども達の約8割が20歳—39歳の若いこともこの回答結果に影響を及ぼしているのであろう。したがって、保護者達は、わが子の老後に対する不安を感じながらも、まだ年老いたと感じていないようである。しかし、約4割の保護者は子どもが年老いたと感じており、彼等は子どもの老いを徐々に実感していると考えられる。しかも、この年老いたと感じている保護者は障害の程度において差がみられ、重度の障害者の保護者の方が、軽度の障害者の保護者よりも強く感じていた（重度：軽度＝42.8%：20.0%）。重度の障害者の保護者は、自分達の老後と同時に子ども達の老後の実感を強く感じているのであろう。

② ある場合、その理由は何か？

あると回答した106名のなかで、「トイレでの助けが多くなった」34名（34.0%）が最も多く、次いで「白髪やしわが増えた」27名（27.0%）、「歩行が困難になった」13名（13.0%）であった。外見的なものの変化に加えて、排泄や身体的な介助が必要になってきていることが分かる。しかも、この回答結果においても、障害の程度において差がみられた。「トイレでの助けが多くなった」の回答には、重度の障害者の保護者が多く（重度：軽度＝41.1%：20.0%）、逆に「白髪やしわが増えた」には、中度・軽度の障害者の保護者の回答が多く（重度：中度：軽度＝19.2%：47.6%：

60.0%）であり、中度・軽度の障害者の保護者は、子ども達の外見的な変化に老後を感じているようである。

③ 介護が必要となる状況があるか？

大部分の障害者は、現在、介護の必要な状況はないが、それでも、「排便・排尿」の介助を必要とするものが36名（13.1%）、「はみがき等、洗顔、整髪」の介助の必要なものは、47名（17.2%）存在し、身体的介護を必要とする障害者が一部存在している。しかも、これらの障害者の障害の程度はほとんど重度であり、重度の障害者は高齢になり、日常生活に様々な介護が必要になることが分かる。

(3) 障害者自身の高齢化についての認識

① 子ども自身、高齢になることを理解していると思うか？

「思う」40名（15.0%）、「思わない」116名（43.4%）、「分からない」111名（41.6%）と回答し、多くの保護者は、障害者自身が高齢化を認識しているとあまり感じていないようである（図6）。ただ、この場合も「思う」の回答結果について、障害の程度の差がみられた。軽度の障害者の保護者の方が、重度の保護者よりもより強く、子ども達が高齢化を認識していると回答していた（重度：軽度＝11.9%：24.0%）。つまり、軽度の障害者は、重度の障害者よりも、高齢化を認識できる能力が

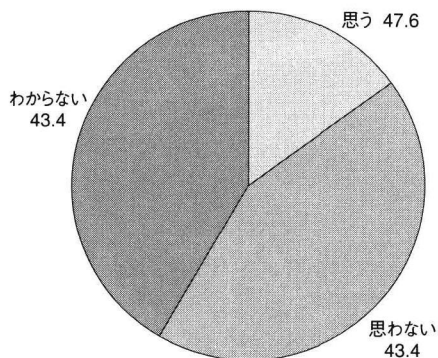


図6 高齢化理解の認識

あると保護者達は感じているのであろう。

② 「思う」場合、その理由は何か？

「思う」と回答した40名のうち、「両親の死の問題について話をする」15名(34.6%)、「自分の身体の衰えについて話をする」9名(22.0%)であった(図7)。「思う」と回答した保護者は、子ども達が死や身体の衰えを認識していると思われる。しかも、この回答の内容については、障害の程度の差が見られなかった。つまり、障害者が高齢化を理解する一つの要因が「両親の死」であると言えよう。その意味で、障害者の生活のなかで、保護者の存在が大きいのと言えよう。

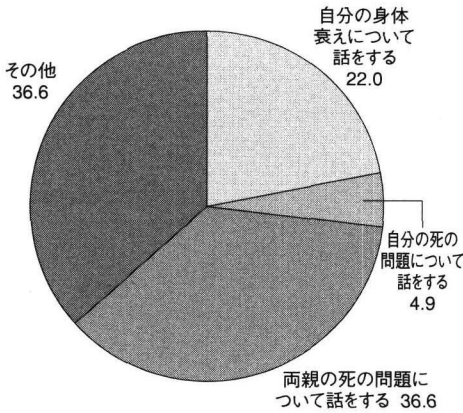


図7 高齢化理解の理由

(4) 障害者の介護について

① きょうだいに障害者の介護を期待するか？

「非常に期待する」と「まあ期待する」が64名(27.6%)、「あまり期待しない」と「ほとんど期待しない」171名(72.8%)であった(図8)。半数以上の保護者が、きょうだいに障害者の介護を期待していなかった。ただ、「期待する」と回答した保護者も障害の程度において、回答の差が見られた。すなわち、軽度の障害者の保護者の方が重度の保護者よりもきょうだいに強く期待する傾向がみられた(重度：軽度=23.4%：43.4%)。すなわち、重度の障害者の保護者は、障害者の介護で苦勞をしてきたので、きょうだいに負担をか

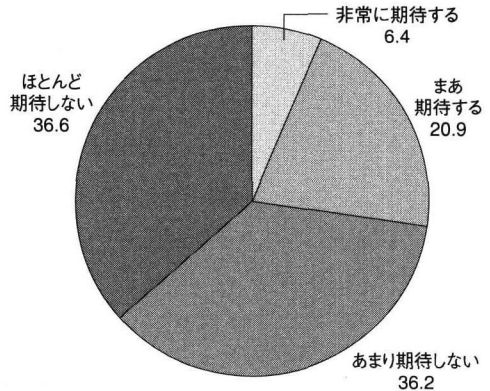


図8 きょうだいの世話期待

けたくないという気持ちを強く持ったのであろう。一方、軽度の障害者の保護者は子ども達に介護が必要とされる状況が生まれたとき、自分達自身も年老いており、きょうだいに介護を期待したのかもしれない。

② 期待する場合、その事を言葉で伝えているか？

なお、「期待する」と回答した64名の親は、言葉で「伝える」48名(67.6%)、「伝えない」27名(32.4%)であり、大部分の保護者は言葉で介護の期待を伝えていた。「伝える」という回答内容においては、重度の障害者の保護者の方が軽度の障害者の保護者に比べてよく伝えていた(重度：軽度=73.3%：33.3%)。重度の障害者の保護者は、きょうだいに介護を依存する強い気持ちを持っているのかもしれない。

(5) 職場での定年制の導入について

① 将来、授産施設などにおいても定年制の導入が必要であると思うか？

「非常に必要である」と「まあ必要である」が33名(24.1%)、「あまり必要ではない」38名(25.5%)、「わからない」75名(50.3%)と回答し、多くの保護者は障害者の定年制については、まだ十分に考えていないようであった。ただ、定年制の導入について、「あまり必要ではない」の回答のなかで、障害の程度に差がみられた。すな

わち、軽度の障害者の保護者の方が、重度の障害者の保護者よりも「あまり必要ではない」と多く回答していた（重度：軽度＝21.0%：41.7%）。つまり、軽度の障害者の保護者は、子ども達が働ける間は、定年が必要ないと強い気持ちを持っていると考えられる。

② 必要ではない場合、その理由は？

ここで必要ではない理由として、「年齢だけで判断するべきではない」、「働ける間は働く必要がある」、「働く場所がなくなると困る」などが多くあげられていた。これらのことから、保護者達は、高齢の障害者に対しては、一般の高齢者のように年齢で高齢であると決めつけるのではなく、また仕事を失うと生活に目標がなくなり、困ると感じているようである。これらのことから、障害者が高齢となり働けなくなった場合、彼等が生きがいや目標を持てるような生活環境を整備して行くことが必要とされよう。

(6) 高齢の障害者の生活場所

③ 高齢の障害者は、どこの生活場所が望ましいのか？

「グループホーム」80名（33.8%）、「特別養護老人ホーム」65名（27.4%）、「自宅」47名（19.8%）、「現在生活している場所」40名（16.9%）、「病院」5名（2.1%）であった（図9）。「グループホーム」や「自宅」、「現在生活している場所」と回答した

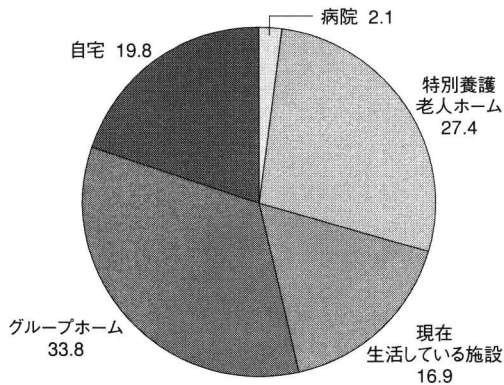


図9 高齢障害者の希望生活場所

親が多く、保護者は、「特別養護老人ホーム」や「病院」などの子ども達の生活が急激に変化する場所を好まないようである。

障害の程度でみると、どのような障害者のグループであったとしても、保護者は「グループホーム」、「特別養護老人ホーム」が、高齢の障害者の生活に相応しいと考えていた。保護者は、「グループホーム」では、生活が規制されずに自由な老後の生活を送ることができるであり、介護がどうしても必要な場合、「特別養護老人ホーム」が相応しいと考えているのであろう。ただ、障害の程度を見ると、軽度の障害者の保護者は「自宅」や「現在生活している場所」を希望していない。軽度の障害者の保護者は、長い間、自宅のなかで子ども達の世話をしてきたので、これ以上子ども達の「自宅」での生活を望んでいないのかもしれない。

④ 高齢の障害者の人生の終焉場所

「自宅」70名（30.8%）「特別養護老人ホーム」53名（23.3%）、「グループホーム」52名（22.9%）、「現在生活している場所」29名（12.8%）、「病院」23名（10.1%）であった。

「自宅」と回答したものが最も多く、本調査の対象者の障害者の多くが、自宅から通所授産施設に通っている影響が反映していると思われる。また、保護者はわが子を住み慣れた生活環境のなかで人生を終えさせてあげたいと希望しているのであろう。ただ、「自宅」と回答した割合は、軽度の障害者の保護者は、他の障害者の子ども達の保護者に比べて少なかった（重度：中度：軽度＝34.2%：32.0%：9.1%）。一方、軽度の障害者の保護者は、他の保護者に比べて特に「特別養護老人ホーム」を希望していた（重度：中度：軽度＝21.1%：24.0%：40.9%）。軽度の障害者の保護者は、やはり長く在宅で生活してきたので、人生の最後の場所で「自宅」以外の「特別養護老人ホーム」、「グループホーム」に期待しているのかもしれない。なお、どの程度の障害の保護者も「グループホーム」を人生の最終的な場所として期待していた。

5. 全体的考察

調査結果から、ある程度、保護者の障害者の高齢化についての思いを明らかにすることができたのではないと思われる。本調査対象となった大部分の障害者は、主に20歳-39歳であり、まだ、高齢の年齢に達していなかったが、それでも、保護者達は、障害者の老後についての不安を抱えていた。その理由としては、「両親自身が高齢となり、障害者の世話が困難である」、「障害者のための老人ホームがない」などがあげられていた。すなわち、これらの結果には、障害者福祉の領域で、高齢の障害者に対する福祉サービスの組織化が行われていないことが反映されていると言えよう。施設福祉では、ある施設関係者は高齢の障害者をそのまま施設で処遇をするのか、彼等のための専用の老人ホームを新たに作るのか、十分な方向性が示されていないため、施設のなかで処遇について、混乱が起きていると指摘していた（三原，2004）¹⁴⁾。一方、在宅福祉では、高齢の障害者も介護保険サービスの対象となりながら、満足なサービスが受けていないケースもあるようである。例えば、高齢の障害者が介護保険による老人デイサービスを受けようとしても、知的障害者に対する理解の不足から、一般老人との交流や職員の対応の難しさにより人間関係に障害が生じ、満足にそのサービスを受けていない場合があるという。したがって、このような状況では、保護者が高齢の障害者の処遇に不安を持つのは当然であるかもしれない。そこで、行政は、施設関係者や保護者の不安を取り除くために、今後、高齢の障害者に対する福祉サービスの明確な方向性を示すべきであろう。

保護者の障害者の高齢化についての印象は、半数以上が年老いたと感じていなかった。これは、調査対象となった約8割の障害者の年齢が、主に20歳-39歳であることから理解できよう。障害者の老化については、一般の人々の老化と変わらないとする報告もあるが（及川と清水，1991）¹⁾、しかし、障害者施設の現場では、65歳の年齢未満でも特別養護老人ホームへ入所した方が良いとす

る報告もあり（大阪・草笛の家，2004）¹⁵⁾、障害者が一般の人々よりも高齢化が早く進むケースもあるようである。また、本調査のなかで、わが子の老化を感じている親達は、その理由として「トイレでの助けが多くなった」「歩行が困難になった」をあげており、主な障害者の年齢が20歳-39歳であることから考慮すると、一部の保護者は、障害者の場合、老化が進むのは早いと感じていると思われる。したがって、高齢の障害者の処遇については、場合によっては、障害者の年齢の若い段階から介護について考えるべきであると思われる。

次に障害者自身の高齢化についての認識は、多くの保護者が、障害者自身が高齢を認識しているとは、思っていない。しかし、認識している回答とした保護者のなかで、その理由については「両親の死の問題について話をする」と回答した。知的障害者のなかには、両親の死のみならず、仲間の死を理解し、死そのものを認識しているものもいると報告されている（Bleeksma，1998¹⁶⁾、佐藤，2003¹⁷⁾）。したがって、障害者のなかには、高齢化を認識し、死の問題について理解するものも存在するので、今後、福祉関係者や保護者達は、障害者に対するターミナルケアも考えて行くべきであろう。

保護者の多くは、きょうだいに障害者の介護を期待していなかった。しかし、一方、親亡き後の障害者の世話について、きょうだいに期待したいとする親もあり、明確な傾向が示されなかったとする報告も存在する（三原，2000）¹⁸⁾。いずれにせよ、保護者である親達は、内心きょうだいに障害者の介護を期待したいと思ったとしても、長年、障害者の養育で苦勞してきた経験を考えると、きょうだいに障害者の介護を期待することを躊躇させるのであろう。したがって、福祉関係者は、障害者の介護について、負担を感じさせないようなサポート・システムを考えて行くべきであろう。具体的に言えば高齢の障害者の家族に対するホームヘルプサービスやデイサービスを充実させて行くべきであると思われる。

高齢の障害者の生活の場所としては、多くの保護者達は、「グループホーム」、「特別養護老人ホーム」、「自宅」、「現在生活している場所」を希望していた。保護者達は「特別養護老人ホーム」については、高齢の障害者にどうしても介護が必要になった場合のことを考えて、この希望をあげたのであろう。「グループホーム」、「自宅」、「現在生活している場所」については、保護者達は、子ども達の生活が変化することなく、制限されず、継続的な自由な生活のなかで老後を過ごして欲しいと考えているのであろう。したがって、障害者が現在、生活をしている場所（施設や在宅）や「グループホーム」で、高齢になったとしても、継続的に生活ができるように配慮すべきであろう。デンマークの高齢者福祉の原則の一つに、高齢者が在宅から施設で生活するようになったとしても、在宅での生活内容が施設でも継続的に保障されるという人生継続的の原則があり（三原，1999）¹⁹⁾、このような原則も高齢の障害者に対して考えて行くべきであろう。

引用文献

1. 柄澤昭秀他：成人ダウン症における心身機能の特徴と加齢の影響，臨床精神医学，18(9)，1413-1422，1989.
2. 及川克紀、清水貞夫：高齢精神遅滞者の老化と施設ケアの問題，障害者問題研究，65，76-82，1991.
3. 及川克紀、清水貞夫：高齢精神遅滞者の施設ケア，発達障害研究，14：3，219-224，1992.
4. 秦安雄：精神薄弱者援護施設入所者の高齢化の実態と施設ケアの問題(1)，日本福祉大学研究紀要，92号，25-39，1995.
5. 牧野弘典：高齢精神薄弱者処遇の実態と展望，発達障害研究，9巻，1号，49-54，1987.
6. 山崎恭裕：障害者福祉施設における高齢者問題，障害者問題研究，27巻，3号，63-70，1999.
7. 大泉溥：高齢障害者問題の意義と課題，障害者問題研究，27巻，3号，184-192，1999.
8. 石渡和美：障害者福祉における障害者への高齢化対応，発達障害研究，22巻，2号，11-20. 2000.
9. 小笠原真佐子：いわゆる重症心身障害児（者）を持つ保護者の心理社会的状況について，ソーシャルワーク研究4，217-224，1978.
10. 新美明夫、植村勝彦：学齢期心身障害児をもつ父母のストレス・ストレスの背景要因一，特殊教育学研究，23-34，1985.
11. 新美明夫、植村勝彦：学齢期心身障害児をもつ父母のストレス一代表事例による母親のストレス・パタンの分析，特殊教育学研究，25，29-38，1987.
12. 三浦剛：在宅精神薄弱者の母親の主観的疲労感，社会福祉学，33，64-87，1992.
13. ゲアレス・ハンゼン編集：「障害者のいる家族」，ドイツにおける精神遅滞者への治療理論と方法，三原博光訳，岩崎学術出版社，52-72，1996.
14. 三原博光：日本とドイツの知的障害者の高齢化状況の国際比較，山口県立大学大学院論集，5，47-54，2004.
15. 大阪・草笛の家：高齢知的障害者の老人福祉施設利用についてその実態と意識調査，さぼーと，567，42-53，2004.
16. M.Bleeksma: Mit geistiger Behinderung alt werden, Beltz, 106-124, 1998.
17. 佐藤繭美：自閉症の人が経験した家族との死別，キリスト教社会福祉学研究36，64-70，2003.
18. 三原博光：「わが国における両親の意識調査」，障害者ときょうだい，学苑社，11，112-136，2000.
19. 三原博光：「諸外国における介護」，介護概論，西村洋子編集，メジカルフレンド社，18-29，1999.

SUMMARY

The thoughts of the parents to the aging of their mentally handicapped

—Through the research on the parents of mentally handicapped —

Hirimitsu MIHARA

Koji MATSUMOTO

This paper aims to clarify about the thoughts of the parents to the aging of their mentally handicapped children through the questionnaire to the parents of mentally handicapped children. 274 parents had answered for the questionnaire. Most of them were mothers. They had anxiety about the aging of mentally their handicapped in spite of the de-

gree of their handicap. But most parents were not feeling that the their children have aged. Also, mentally handicapped persons are not feeling themselves that they are aging. Many parents will not expect the care of mentally handicapped children to their siblings, because they will not want to have the burden of siblings to the care of mentally handicapped children.

The place where the parents expect as the end life of mentally handicapped are “their own house”, “group home” “institution for the handicapped.”

It seems that parents hope that their children finish their life with the living environment that got used to living.